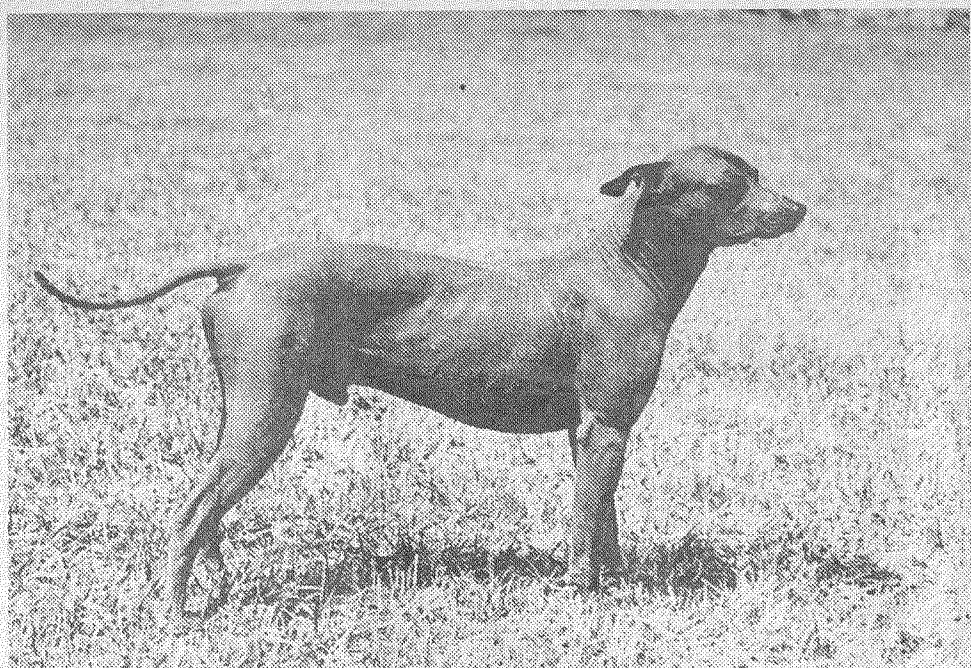




写真・森下 茂行

動物王国の四季

〈8〉

畑 正憲

メキシカン・ヘアレスという犬は、まことに愛とこりんでがさつて、突拍子もなく、一般の人にはおすめ出来ない飼ひ難い犬である。何かこう、脳の中から一本釘が抜けている感じがする。

わが家のヘアレスは、アダムとイブという名を与えられた。

そこつ者

K子を中心になつて世話をしたが、しつけを受け付けない、ちよつと目を離すと、こんでもない悪さをするので、涙ぐんで、郷里へ帰りますと言つたりした。

長じてアダムは、たゞましいオスになった。敏感であり、手をすべらせてチンコをさわると、根もとがすぐに大きく

なつた。犬の海綿体はシツク状であり、赤ん坊のごぶしみにたいにあぐれてくる。

オス犬の場合、尿がたまると、海綿体がふくれてくる。

つまり、ボッキと同じ状態になるわけだが、人の朝立ちと同じで、尿を出せばほとんどしまふ。

私はここに着眼して、室内犬の下としつけをしたことが

「どうしたんだい？」

「あのあの、ア、ア……」

「さあ落ちて着いて、水でもくらた」

「アタムのものがイブの中に」

「それは目出度いじゃないか」

「それがあの肛門ですから、イブが可哀そう、痛がつて、なきわめいて」

「な、なんと」

何千匹と犬を見ているが、

「上」と「下」を間違えたアダム

ある。オスに限るのが難点だがチンコの根もとをさわると、大きくなつていたら外へ出し、おしっこをさせるのである。

上下を間違えた例など見たととも聞いたこともなかった。さすが、そこつのヘアレスだ。

K子の報告通りだった。海綿体は中であぐれるから、イブは、さぞや痛かつたろうが、しばしまでどうしようもなかった。

以来、イブは男ぎらいになつた。

ある春のことだ。K子が青ざめてとびこんできた。

「ア、ア、アダムが、イ、イ、イブが……」

☆ ☆

春はめぐり、発情はくるのだが、その気はあつてそわそわするの、オスの姿を見ると、尾を股の間に立てて腰を落としてしまつた。

イブは、日頃、アダムが大好きである。唯一無二の親友なのだが、アダムがオスになると必死で逃げる。

一旦、心に

刻まれたものは、なかなか

取り除けないものである。

最近、私はイブの心の治療をしようと思ひ始めた。外国の旅が多く、いいタイミングで家にいることがすくないが、次の発情がきたら、ちよつとした手品を使つてみた

い。ちまきいっただろオグサミ、ここでタネ明かしをする

ことをお約束しよう。

(作家)